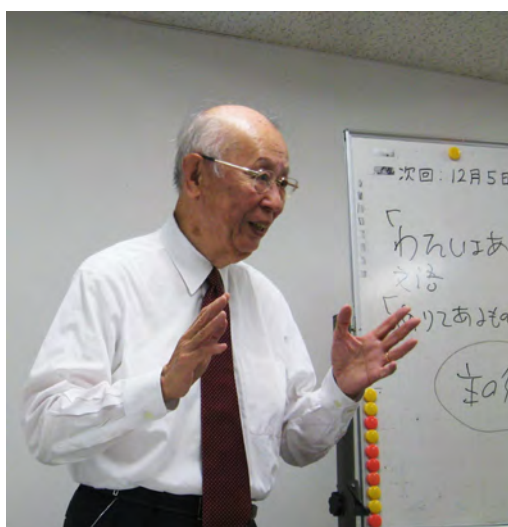


一般社団法人ディレクトフォース会員向け「勉強会」講義録

一神教の神と人間

心やすまる三宗教の共通基盤



秋山 哲

元毎日新聞常務取締役
元日本イスラエル親善協会会長

第1部 「一神教のもつれた糸はほぐせるか」

第2部 「神と人はどのように関わってきたか」

目 次

はじめに	4
第1回 一神教とは何か	7
第2回 「神の名」の重要性	9
第3回 旧約聖書とユダヤ教の考えていること	10
第4回 新旧約聖書とキリスト教の考えていること	11
第5回 クルアーンとイスラムの考えていること	13
第6回 三宗教はどのように争ってきたか	14
第7回 和解と一致は可能か	15
第2部を始めるにあたって	19
第1回 罪とは何か	21
第2回 神を信じるとはどういうことか	23
第3回 神と人間は契約関係にある	24
第4回 神の主権と奇蹟	26
第5回 神に罰せられた人たち	27
第6回 神と論争した人たち	28
第7回 「神の選び」と大罪	30
第8回 選民と異邦人	31
第9回 神は人をどこに導くのか	33
一神教関連系譜	35
ユダヤ教、キリスト教、イスラム関連略年史	37



三宗教のシンボルマーク。上からユダヤ教 キリスト教 イスラム

はじめに

三つの一神教に関わってきた

一般社団法人「ディレクトフォース」の会員向けに行った一神教についてのレクチャーをまとめた冊子です。ユダヤ教、キリスト教、イスラムという三つの一神教の信徒数は世界人口の半数を占めるまですべてになっています。しかし、日本ではこの三宗教についての知識は不十分であり、理解が進んでいません。世界的に見ても、三宗教相互間に理解は欠如しています。理解がないままに、宗教にからむテロや紛争が続発し、ヘイト・スピーチが広まっています。ヘイト・スピーチがテロを呼ぶという悪循環に陥っています。

私は、これまでの人生を通じて、三つの一神教それぞれに関わってきました。キリスト教の礼拝には長い期間参加し、70歳になって受洗しました。新聞社特派員としてイスラム国家を幅広く取材しました。公益社団法人日本イスラエル親善協会の理事、会長として20年にわたってユダヤ教とも関係を持ちました。このような体験から考えて、三宗教間の相互無理解、相互不信に危機感をいだきます。一神教だから共生できない、といった批判を聞くと、何とかしなければならぬ、という焦燥感が生じます。

どこが違い、どこが同じなのか

このような気持ちから、三つの一神教を一体として解釈し理解するディレクトフォースでのレクチャーを始めることになりました。宗教を信じる、信じないに関わらず、大きな勢力を持っている三つの宗教が何を目指しているのか、どこが違い、どこが同じなのかを理解するならば、無益な争いを引き起こす不幸が避けられます。また、このような理解なしには現在の社会の動きは理解できない、と思うからです。

まず「一神教のもつれた糸はほぐせるか」と題したレクチャーを2016年10月18日に始めました。月1回、各回2時間です。2017年4月24日の第7回でひとまず打ち止めとしました。

「神と人はどのように関わってきたか」というテーマで再開したのは2017年11月7日でした。やはり月1回のペースで、2018年7月17日に最終の第9回となりました。

毎月、ディレクトフォース会員20人前後が集まって熱心に受講していただいたのは感謝にたえません。

基本三啓典に依拠

私は、宗教に関する研究者ではありません。神学教育も受けてはいません。また、三つの宗教に関連する膨大な研究成果や資料をほとんど読んでいません。私は三宗教の基本啓典である旧約聖書、新約聖書、クルアーン（コーラン）だけに典拠して話を進めました。三宗教の根本はこの三つの啓典にあると思っていますからです。

レクチャーでは三つの啓典からふんだんに引用した資料を配布しました。旧約聖書から約480箇所、新約聖書から約240箇所、クルアーンから約120箇所です。

引用したのは、旧約聖書、新約聖書については『聖書 新共同訳』（日本聖書教会、1998年）、クルアーンについては『コーラン』（井筒俊彦訳、岩波書店、1971年）です。

この小冊子は、各回のレクチャーの報告としてディレクトフォースのWebサイトに掲載してもらった記事を幾分手直ししてまとめました。小冊子の形にしていたことは、より広い範囲の人々に三宗教に関する知識が広まることになると思います。感謝しています。同時に、私の説明の中に、理解不足、誤解、間違いなど、正すべき点があるならば、関係の方々のご指摘いただきたいと思います。巻末に、「ユダヤ教、キリスト教、イスラム関連略年史」、「一神教関連系譜」があります。

秋山 哲

秋山哲の経歴

1934年生まれ。博士（経済学）。ディレクトフォース会員
1957年 同志社大学経済学部卒。毎日新聞社入社
1973年 同社ジャカルタ特派員
1979年 「イスラムの挑戦」取材チーム・キャップ
1986年 同社大阪本社編集局長
1996年 同社常務取締役東京本社代表で退社
1998年 奈良産業大学教授、同志社大学講師（2005年退職）
2000年 日本イスラエル親善協会副会長
2004年 受洗
2008年 ホロコースト記念館理事（2016年退任）
2012年 ホロコースト記念館平和教育支援会代表理事（2016年退任）
2013年 日本イスラエル親善協会会長（2016年退任）



第1部

「一神教のもつれた糸はほぐせるか」

第1回 一神教とは何か

2016年10月18日

三宗教の理解なしに世界は分からない

最初に、このレクチャー開催の目的を話しました。ポイントは以下の3点です。

1. 一神教に関する基礎的な知識を提供する。
2. 一神教に違和感をもつ日本人が多いが、仏教、神道にも一神教的要素があり、理解可能であることを説明する。
3. 一神教はお互いに対立していて共生不可能という考えがあるが、そうではないことを説明する。

また、私自身の宗教的背景の説明をしました。

仏教徒の家庭に生まれ、キリスト教主義の学校に10年通ったこと、キリスト教の礼拝に40年以上参加して70歳で洗礼を受けたこと、これがキリスト教と私の関係です。イスラムとは、新聞記者として関わります。人口的に最大イスラム国家であるインドネシアに特派員として駐在し、さらに、イラン革命直後に「イスラムの挑戦」取材班のキャップを務め、中東諸国取材しました。新聞社退職後に、日本イスラエル親善協会の副会長、会長の職に20年近く就いたこと、ホロコースト記念館理事を務めたことがユダヤ教との関係です。

そのうえで本題に入り、三つの一神教の基本について話しました。

ユダヤ教、キリスト教、イスラムという三つの一神教の合計信徒数は37億人以上にのぼり、世界人口の2分の1を占めていて、一神教の理解なしには世界を理解することができなくなっています。

「アブラハムの神」が共通の神

重要なのは、三つの一神教が信じている「一人の神」は、ばらばらの一人の神ではないことです。メソポタミアから出たアブラハムがユダヤ人の祖で、ユダヤ教は彼から始まりますが、この「アブラハムが信じた神」が三宗教共通の神です。キリスト教



は三位一体の神を信じていますが、父と子、聖霊の三つが一体として「アブラハムの神」だという考えです。イスラムは神をアッラーと呼びますが、アッラーはアブラハム（アラビア語ではイブラーヒーム）の信じた神であり、クルアーン（コーラン）はイブラーヒームを「忠実な信徒の軌範、純正な信仰の人」（16章121節）と主張しています。キリスト教初期において、創造神と至高神を区別する考えがありましたが、これは異端として葬られました。

神に対立する「悪」という考えがありますが、「悪」は神から送りこまれる試練であって、神と悪を対立させる二元論は一神教の考えと矛盾します。神が宇宙万物を創造した、神が創造しないものは存在しない、これが三宗教が一致して考えている世界です。

神が人に内住する

では神はどこにいるのか。天にいるのか。神が遠い天上にあつて地上世界に干渉しないという理神論は一神教の世界とは異なります。また、あらゆるものの中に神が宿るという汎神論も違います。神は被造物世界のただ中にいる、常にいる、どこにでもいる、遍在しているというのが一神教の考える神です。

その神は信徒の心の中に宿る、内住するという考えが重要です。神が内住するとい

う神体験、神との出会いを信徒は待つのです。ユダヤ教を守るために働いていたパウロは、キリスト教徒を迫害するために向かったダマスコ門外で「なぜ、わたしを迫害するのか」とキリストに天から問いかけられる（新約使徒言行録9章4節）という神体験をしてキリスト教の宣教者へと回心するのです。

大数学者パスカルは神と出会いました。1654年11月23日の夜です。彼が肌着に縫い付けて残した布にその時の状況が書いてあります。「正しき父よ、われは汝を知れり。歓喜、歓喜、歓喜、歓喜の涙」（『パンセⅡ』）。

この日の最後には、神道と一神教に関する話をしました。

神道は多神教の典型のように考えられていますが、幕末の国学者、平田篤胤や、もう少し古い吉田兼俱は「天御中至尊」（あめのみなかめしのみこと）や「国常立尊」（くにとこたちのみこと）を神道の「主神」と考えました。厳格な一神教とは距離がありますが、多神教と一神教が断絶した別世界ではないということでしょう。

三宗教の生い立ちと紛争

第1回のレクチャーでは、三宗教の経典や、三宗教の歴史的な関わりに関する資料の説明も行いました。基本経典の説明は以下の通りです。

ユダヤ教の聖典はT N K（タナハ）で、キリスト教徒のいう旧約聖書と同じ（構成順序は違う）です。モーセ五書、預言書、諸書、合計39巻で構成されます。キリスト教は、旧約聖書、新約聖書合わせて66巻を聖典とします。新約はイエス・キリストがもたらした新しい神と人との契約です。4世紀に現在の形に整えられました。イスラムでは、ムハンマド（マホメット）に降った神の言葉であるクルアーン（コーラン）114編が聖典です。

三宗教の歴史的関わりに関しては以下の説明をしました。

信仰の祖、アブラハム（BC2000年前後）は、神から旅立てという言葉を受けて、行き先が分からないままメソポタミアのウルから出て今パレスチナと呼ばれているカナン地方に入ります。エジプト人女性との間に生まれたのがイシュマエル（アラビア語ではイスマール）で、アラブ民族の始祖となります。

正妻との間で次に生まれるのがイサクで、ユダヤ民族の祖です。この系統からモーセ、ダビデなどが現れ、ダビデの子孫から救世主が出るという預言が行われました。イエ

第2回「神の名」の重要性

2016年11月7日

知識なしに言論の自由はない

10月の第1回勉強会に参加していない受講者が多かったことから、冒頭に改めて勉強会の目的を話しました。その中で、フランスの漫画出版社シャルリー・エフドへのテロ攻撃と言論の自由を巡る問題を例に、十分の知識なしにヘイトすることは、隣人愛というユダヤ教、キリスト教の黄金律を無視する危険な行為であることを強調しました。言論の自由は知識と理解があつて初めて成立するものです。イスラムを含む一神教について、一定の知識と理解をもつ必要がある、というこの勉強会の目的を改めて強調しました。

次いで、第1回の補足として、キリスト教の根幹であり、ユダヤ教、イスラムが共に認めていない「三位一体」という神観の解説を行いました。

また、第1回で積み残しになった「仏教と一神教」「偶像の問題」を説明しました。仏教にも、浄土真宗で阿弥陀仏を唯一の救済者として信仰するような一神教的要素があること、偶像を禁止するモーセの十戒と神道の共通点を取り上げ、日本人的な諸行無常が旧約聖書にも登場することを話しました。

「神の名」は神の本質

第2回の主テーマは「神の名」としました。神の「御名」は三つの一神教にとつて、単なる名前、符号ではなくて、神そのものの、神の実体と認識されていることを新旧約聖書とクルアーンの引用によって示しました。「御名」には神の力が存在すること、「御名」を唱えることが神による救済への条件であることを話しました。終末の苦難の中で「主の御名を呼ぶ者は皆、救われる」（旧約ヨエル記3章5節）と書かれていることで分かるように、神による救いのキーワードは「神の名」です。

しかし、三宗教にとつて神の名は何と違うのか、は少し面倒です。聖書で神は自らの名をいくつか示しています。アブラハムに対して「わたしは全能の神である」（旧約創世記17章1節）と名乗ります。モーセに対しては最初「わ

スは系図的にはダビデの子孫として生まれ（BC7〜4年頃）、十字架につけられて死に、3日後に復活します。AD70年のローマ軍の攻撃によつてユダヤ人の国は滅び、ユダヤ人は離散の民となります。

ムハンマドはAD570年頃に生まれ、神の啓示を受け、イスラムを起こし、イスラム帝国を築くようになります。

キリスト教徒はイベリア半島でのレコンキスタ（国土回復運動AD1031〜1492）や十字軍の遠征（AD1096〜1291）によつてイスラム教徒と戦い、長年にわたつてユダヤ教徒を迫害します。第一次と第二次の世界大戦を経て、中東にイスラエル国が復活、イスラエルとアラブ諸国は4回にわたる中東戦争を戦います。



2016年10月18日（火）14:00から16:00まで、27名が参加して、第1部「一神教のもつた糸はほぐせるか」第1回目の勉強会が、DF八重洲事務所の会議室で行われた

たしはある」（旧約出エジプト記3章14節）と名乗り「これこそ世々にわたしの呼び名」（同15節）といます。さらに、モーセがエジプト王のところへ行つた時には「わたしは主である」（旧約出エジプト記6章2節）と新しい名を示します。ユダヤ教ではこれが神の名と考えられています。

読み方が失われている神の名

問題はこの「主」です。旧約聖書を記載しているヘブライ語で四文字になっています。ローマ字で表記するとYHVHで「聖なる四文字」といいますが、読み方が失われています。なぜか。「主の名をみだりに唱えてはならない」（旧約出エジプト記20章7節）という十戒の規定によつて、神の名を示すこの四文字が出てくるとそれを発音せずに「主（アドナイ）」と読みかえて来たためです。しかも、ヘブライ語が子音しか表記しないために本来の読み方が分からなくなっているのです。日本語聖書はその箇所をすべて「主」としていますが、「主」はあくまで読み替えたものであつて、本当の神の名とはいえません。

キリスト教では、この四文字をエホバとかヤーヴェと読むのではないかという説を建てますが、確たる根拠がありません。また、イエスは神が人となつたときの名であり、キリストは救世主という称号ですから、神の名とはいえません。三位一体の神を何と呼ぶのか、呼び方は分からないのです。

神は、自らの本質を明らかにするために「わたしは全能の神」や「わたしはある」の外にもいくつかの名乗りをしています。これらも含めて神の名とする考え方を話しました。

イスラムは「アッラー」を神の名としていますが、その意味は「The God」です。ムハンマド以前に存在したアラブ多神教の最高神の名前でもあります。それが一神教の絶対神の名に変化したのです。ユダヤ教徒もキリスト教徒も「アッラー」を信じている、アブラハムの神はアッラーだ、というのがイスラムの立場です。

クルアーンのすべての章は「アッラーの御名において」という文言で始まります。それでもわかるように、三つの宗教にとつて、神の「御名」は極めて大切なものです。

称名念仏との類似性

日本語聖書は「神」という言葉を使用していますが、もともと日本語の「神」は「良きにつけ、悪しきにつけ、普通でないもの」（本居宣長）であって、聖書が「神」を使つた結果、「神」の意味が変化したこと、などをお話しました。

神の名を呼ぶことが、三つの一神教にとって、救済にあずかるための重要な宗教行為ですが、仏教の「称名念仏」と行為形態としては同じであると指摘しました。称名信仰は中国の曇鸞（AD476～542）に始まり、日本では空也（903?～972）が広め、法然、親鸞へと受け継がれてきています。

その延長線上で、私の座禅経験についてのお話もしました。



アブラハムとモーセの移動。青線はウルを出たアブラハムがカナンに定住するまで。緑線は、モーセに率いられたユダヤ人がエジプトを出てカナンに入るまで。（『pen books ユダヤとは何か』市川裕監修、阪急コミュニケーションズ、2012）

第3回 旧約聖書とユダヤ教の考えていること

2017年1月16日

神への反逆と信仰維持

この勉強会の第1回目は「一神教とは何か」、第2回目は「神の名」というテーマで話しました。3回目から、三つの一神教がそれぞれどのようにして成立し、その聖典は何を説いているか、に移ります。

この日は、一神教の源というべきユダヤ教と、その聖典である旧約聖書（TNH）の説明を行いました。

唯一神信仰は、BC2000年前後にメソポタミヤのウルで生まれたユダヤ民族の祖、アブラハムに始まります。彼は、神の指示を受けて、カナン（パレスチナ）に移動します。その子孫はその後エジプトに移って奴隸的状况に苦しみます。BC1250年頃、モーセが現れ、ユダヤ人を率いてエジプトを脱出し、カナンに再進入します。BC10世紀のダビデ王、ソロモン王の時代に最も強大な国になりますが、アッシリヤ、バビロンに攻略され、捕囚となり、再建した国はAD70年にローマに滅ぼされ、離散の民族となります。

この歴史の中で、ユダヤ民族はたびたび神に反逆しますが、基本的にはアブラハムの信じた唯一神信仰を継承、維持します。

信じることが「義」

アブラハムは、カナンに入った時に、神から「この土地を与える」（旧約創世記12章7節）「子孫は星の数ようになる」（創世記15章5節）と約束されて、「主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ」（創世記12章8節）のです。「アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」（創世記15章6節）と旧約聖書は書いています。「義」というのは神の前に正しいと認められることを意味します。ユダヤ教は、戒律を守るという行いによって義とされる、という信仰ですが、ユダヤ教の祖、アブラハムは、神を信じて御名を呼んだだけで義とされたのです。イスラムはアブラハムのこの信仰を模範としています（クルアーン16章121節）。行いではなく、ひたすら神を信じるこの信仰形態は、ユダヤ教の延長線から生まれたキリスト教、イスラムを考えると、きわめて重要な視点です。

いのです。人がすべて神に従い、世界秩序が回復する、神が導く平和な世界が現出する、というのがユダヤ的考え方です。国連ビルに刻まれているイザヤ書の一節「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」（旧約イザヤ書2章4節）という世界を待ち望む、というのがユダヤ教の信仰です。

第4回 新旧約聖書とキリスト教の考えていること

2017年2月13日

旧約に預言されているキリスト

勉強会は前回から三つの一神教それぞれの「啓典と信仰」について話しています。第4回は「新旧約聖書とキリスト教」です。

まず、イエス・キリストの誕生から宣教、そして十字架上の死と復活の概略を説明し、キリストが「再臨」する、つまり再び降ってくる、というのがキリスト教の信仰であることを話しました。

このような救世主（キリスト）の姿は、キリスト誕生以前に完結している旧約聖書にたびたび預言されていることを、旧約の引用によって示しました。重要なのは、ダビデ王の子孫から救世主が現れる、とする預言（旧約サムエル記7章11～16節）と、イザヤによる詳細な預言（旧約イザヤ書9章5～6節他）であることを説明しました。イザヤは、キリスト誕生の800年も前の預言者ですが、キリストの十字架刑による死の意味までも詳しく預言しています（イザヤ書53章1～12節）。後から誰かが書いたのだという説がありましたが、1945年に発見され、紀元前70年より前のものと確認された「死海文書」にイザヤ書のこの記事が含まれていたの、800年前の預言であることに疑問はありません。

もたらされた「新しい契約」

イエス・キリストは、このようにユダヤ教の枠の中に現れていて、彼も新しい宗教を打ち建てようとしたわけではありません。彼はユダヤ教の改革者でした。彼の立場は、

その背後には、ユダヤ人は神に選ばれた「選民」である、という意識があります。選民思想は、しかし、ユダヤ人が他の民族に勝って優れている、という考え方ではありません。私は、ユダヤ教の神が本当の神であって、今も生きている、という証拠としてユダヤ人が選ばれたのだと考えています。ユダヤ人は離散から2000年近く経って現在のイスラエル国を再建しました。このような例は世界にありません。

古いところでは、バビロン捕囚の200年も前の預言者イザヤ、100年以上も前の預言者エレミヤなどが、捕囚と解放を正確に預言しています。このことは、神が実在し、神の計画が存在し、世界は神の計画に従って動いている確かな証拠ということができます。それを証明する道具として選ばれたのがユダヤ人です。

神の支配による平和が願い

ユダヤ教の信仰について、もう一つの特徴を上げると、人間の死後の天国・地獄という考え方がほとんどないことです。旧約聖書の終末論はこの世の終わりを意味していません。物質世界が終わって、非物質的な霊的天国で喜びを得る、という発想はな

「新しい契約」、つまり、神がモーセに与えた「古い契約」ではない新しい神の啓示をもたらす、というものです。旧約聖書のエレミヤ書は、ユダヤ人が神との契約を守らなかったで、神は「新しい契約」を与える、ということを書いていますが（旧約エレミヤ書31章31節）、イエス・キリストがその「新しい契約」なのです。

ではキリスト教の信仰はどのようなものか。4世紀に確立した「使徒信条」が信仰の基本であることをお話ししました。その内容は①三位一体の神であること②キリストがこの世に実在し、十字架刑によって死に、復活し、天にのぼったこと、復活したこと③再臨すること④聖霊を信じること、など信じるべき項目が列挙されています。

この中で、重要であると同時に理解が難しいものとして、十字架上での死、復活そして再臨について詳しく考え方を述べました。

特に、終末に起こるとされる再臨の時には、「死者がまず復活し、生きているものが空中に掲挙され、栄光体に変えられる」（新約イテサロニケ書5章16〜17節）と新約聖書が述べていると、紹介しました。これは、霊的天国を考えないユダヤ教の終末論とは大きな違いです。

パウロが世界宗教確立

ユダヤ教との相違としては、初期キリスト教の時代に、割礼、食事規定といった戒律を守る必要がないと決めたことも重要です。これはキリスト教が「ユダヤ教の一つの派」という立場を捨てる分岐点でした。

また、パウロというキリスト教徒迫害者が神キリストの声を聴いて回心し、異邦人（ユダヤ人でない人たち）への宣教を神に命じられたことが重要な意味を持ちます。パウロが各地の信徒に送った書簡が新約聖書の中の大きな部分を占めていて、彼がキリスト教の理論体系を作り上げたということができます。特に、選民とされるユダヤ人をどう考えるか、については、「異邦人が救われることによってユダヤ人が妬みをおこし、その結果、ユダヤ人も救われる」（新約ローマ書11章11節）というパウロの理論を説明しました。このような理論に基づくパウロの宣教がユダヤ教から独立した世界宗教としてのキリスト教を確立したといえます。

第5回 クルアーンとイスラムの考えていること

2017年3月6日

神は二つの「大いなる国民」を約束

第3回から、三つの一神教それぞれの「経典と信仰」について話していますが、今回は「クルアーン（コーラン）とイスラム」です。

旧約聖書は、アラブ民族の祖としてイシュマイルをあげています。アブラハムとエジプト女性との間にうまれた長子です。正妻との間にその後生まれた異母弟イサクがユダヤ人の流れをつくっていきませんが、イシュマイルの方はエジプト人を妻に迎えてアラブ民族の流れを作るのです。神は、アブラハムに対して、この二つの民族ともに「大いなる国民とする」（旧約創世記12章2節、17章20節）と約束します。民族的に同根であることはクルアーンも認めています。



クルアーン冒頭の「開扉」の章。「慈悲ふかく慈愛あまねきアツツラーの御名において」と始まる。イスラム教徒は毎日5回の礼拝で必ず読む。（『日亜対訳クルアーン』中田考監修、作品社、2014）

アブラハムがメッカ神殿を建てた？

宗教的により重要なのは、アブラハムとイスマイル（イシュマイルのアラブ語表現）の二人がメッカのカバ神殿の礎石を打ち立て、アツラーに捧げ、二人がアツラーに帰依したとクルアーンが書いていることです。歴史的事実であるかどうかは別にして、イスラムは今から4000年も前、アブラハムがいた時代にスタートしたということになります。宗教的にも、ユダヤ教、キリスト教と同様に、アブラハムにつながる



「岩のドーム」。イスラムがエルサレムを占領（AD638）後に建設したモスク。ムハンマドが夢の中で天に昇った場所とする。もともと、アブラハムが息子イサクを犠牲として献げようとしたモリヤの山といわれ、ソロモン王が神殿を建てた場所である。（「ISRAEL」。イスラエル政府観光局）

いうことになります。

具体的には、ムハンマド（モハメット）がAD610年頃、洞窟で瞑想していた天使ガブリエルから啓示を受けることによってイスラムが始まります。ムハンマドはアラブ人の中のクライシュ族の一人としてメッカに生まれたのですが、多神教を信じるクライシュ族には受け入れられず、メディナに移ります。最終的にはメッカを征服し、メッカの多神教神殿をイスラムの神殿とします。今も世界中から何百万人という巡礼が行くところ です。

イスラムの信仰は「六信五行」といいます。神、天使、教典、預言者、来世、天命の六つを信じること、信仰告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼の五つを行うこと。これが信徒の守るべき義務です。「行い」を求める点では戒律を守るユダヤ教と近いといえます。神を信じることをのみを求める「信仰義認」のプロテスタント・キリスト教とは違いがあります。

この「六信五行」について解説しましたが、重要な点を記載します。

アツラーはThe God

イスラムの神はアツラーといいますが、アツラーは普通名詞の神に定冠詞がついたもので、「神様」という意味だという点。第2回の勉強会で「神の名」が重要だという話をしましたが、三つの一神教を考えて行く上でこのことは一つのポイントになると考えています。

最後にして最大の預言者はムハンマドとしていますが、新旧約聖書の預言者が25人もクルアーンに登場します。中でも、ノア、アブラハム、モーセ、イエス（アラビア語ではイーサー）はイスラムにとっても重要な預言者です。このことをユダヤ教、キリスト教の人々がどれだけ知っているのでしょうか。

特にイエスについては、神がマリヤに息を吹き込んだという誕生物語がクルアーンに詳しく書かれ、「メシア」とも表現されます。イエスが神であるというキリスト教の考えを認めませんが、十字架刑によって死んだことを否定し、神が傍に引き上げたのだという理解（クルアーン4章158節）をしています。神が他の預言者と異なる特別の扱いをしたと評価しているのです。クルアーンがイエスをどう見ているか、についてもキリスト教世界ではかなりの誤解が広まっているようです。キリスト教徒もクルアーンを読んでひずみのない理解を持って欲しいと思います。

神は迷わせることも

イスラムの考える来世について、また、人は神の御心次第で信仰にはいることもあれば、迷いの道をさまよいつづけることもある、という天命の考え方の説明をしました。五行の中では断食が重要です。ユダヤ教にも断食はありますが、イスラムの要求する1か月の断食は重いものです。熱帯での断食は「神を畏れかしこむ気持ち」を育むと考えられています。また、大切なのは貧しい人などに寄付をする喜捨（ザカード）で、これは貧富の格差のない平等社会をめざすイスラムの特色です。

「六信五行」の外にもイスラムの務めがあります。例えば食事規定。昨今も、イスラムの食事規定を守るための「ハラル認証」というものが注目されていますが、ユダヤ教の食事規定（コーシャ）とくらべると単純で、クルアーンは面倒なことを要求していません。

そのほか、金利禁止や男女関係に関する事項も説明しました。また、ジハード（聖戦）に関して、クルアーンには「無信仰者たちや似非信者どもを敵としてあくまで戦え」（クルアーン9章74節）「和平和平と騒いではならぬ。お前たちの方がきつと勝つ」（クルアーン47章37節）などと書いてあることを紹介しました。同時に、ムハンマド在世中の戦いは小競り合い的な小規模の戦いであつたことも説明しました。

第6回 三宗教はどのように争ってきたか

2017年4月3日

「神殺し」は間違い

第6回は、三つの一神教がこれまでどのように争ってきたか、その事実関係を振り返ることにします。

ローマ皇帝がAD313年にキリスト教を公認します。それ以降、キリスト教徒がユダヤ教徒を迫害する形で、一神教同士の紛争が始まります。その原因の一つは、キリストの十字架刑にあります。キリストを「十字架につける」（新約マタイ27章23節）と要求したのはユダヤ人であつて、彼らが「その血の責任は、我々と子孫にある」

（マタイ27章25節）と言つたと新約聖書に書いてあるために、キリスト教徒たちはユダヤ人を「神殺し」として迫害するようになりました。

ユダヤ人を「神殺し」とする考え方は間違つているのです。キリストは人類の罪をあがなうために、自分の命を犠牲（いけにえ）として捧げたのですから、「十字架につける」と叫んだユダヤ人は神の計画を進める役割を果たしたと考えるべきです。キリスト自身が「成し遂げられた」（新約ヨハネ19章30節）と言つて息を引き取つたと聖書に書いてあることからそのことが証明できます。2000年になつてようやく、ローマ法王はユダヤ人に謝罪のミサを行いました。

また、旧約聖書は、金利禁止を規定しています（旧約出エジプト記22章24節）が、神は「わたしの民」（同）から金利を取ることを禁じているのです。キリスト教徒もユダヤ教徒も、神が「わたしの民」というのは自分たちのこと、と考えます。従つて、キリスト教徒同士、ユダヤ教徒同士は金利が禁止されているが、ユダヤ人がキリスト教徒に金を貸して金利を取るのには神が許している、と双方とも考えるのです。その結果、ユダヤ教徒がもっぱら金融業を担当し、キリスト教徒が利子負担に苦しむということになります。ここにユダヤ人憎悪のもう一つの根があります。

十字軍、レコンキスタ、ホロコースト…

エルサレムをイスラムから奪い返すという十字軍（AD1096～1291年）はユダヤ人を大量に殺害しました。イスラムが支配していたスペインをキリスト教側が奪回するレコンキスタ（国土回復運動。AD1031～1492）によつて、イスラム教徒とともにユダヤ教徒もスペインから追放されたり、キリスト教への改宗を迫られました。あちこちの国がユダヤ人を追放し、ゲットーという隔離地区にユダヤ人を押し込めました。ユダヤ人がキリスト教徒の子供を殺すとか、ペストの原因はユダヤ人だとか、間違つた非難が浴びせられました。

ユダヤ教徒迫害の頂点となつたのはナチスによるホロコースト（AD1942～1945）です。ヨーロッパにいたユダヤ人が600万人も殺害されました。この背景にはユダヤ教徒に対する長年の憎悪があります。

イスラム教徒の戦いはどうだったのか。ムハンマド在世中にユダヤ教徒との戦いがありますが、どちらかといえば小規模の戦いです。イスラムは短期間に広大な地域を支配するようになりますが、ユダヤ教徒は人頭税という税を払う形でイスラム教徒と共存していました。ユダヤ人は国を失っていますから戦争はできないのです。キリスト教徒との大きな戦いは、十字軍とスペインでのレコンキスタです。

中東紛争は宗教戦争か

問題が複雑化するの第一次世界大戦以降です。当時イスラムの支配者であつたオスマン・トルコがドイツと同盟していたので、イギリスなどがトルコ攻略を進めます。その方策として、トルコに対するアラブの反乱を仕掛けます。そこでイギリスは不思議なことに「三枚舌外交」をやります。アラブに対しては中東におけるアラブの独立国家建設を約束する。フランスとは、中東を分割する「サイクス・ピコ協定」を結ぶ。ユダヤ人には「民族郷土」建設を認めるバルフォア宣言を与える。同じ地域に矛盾する三つの約束（AD1915～1917）をするのです。これがそれ以降の中東紛争の基本原因になりました。

国連決議にしたがつてイスラエルが建国（AD1948）されると直ちに第一次中東戦争が始まります。イスラエルとアラブは4回も戦闘を交えるのです。未だに中東紛争は解決していません。

このように見てくると、第一次世界大戦以前と以降では状況が違います。現在の中東を巡る戦い、紛争は宗教上の理由で引き起こされているとは必ずしもいえないのではないのでしょうか。宗教の違いが背景にあるとしても、紛争の主たる原因は国際政治の問題といふべきです。

第7回 和解と一致は可能か

2017年4月24日

ユダヤ人が妬みを起こすまで

「一神教のもつた系はほぐせるか」の最終回です。紛争を繰り返して来た三つの一神教が一致・共生することが可能か、が最終回のテーマです。その観点から旧約、新約聖書、クルアーンに記載されている文言を検討します。

まず、ユダヤ教の聖典である旧約聖書がどう書いているか。これまでも説明しているように、旧約聖書にはキリストがいずれ出現するという「キリスト預言」がいくつも記載されています。神が、それまでの契約（旧約聖書の内容）ではない「新しい契約」

を与える、と明確に述べています。

これを受けて、「新しい契約」がイエスによつてもたらされた、とするのがキリスト教です。キリスト教の理論を確立したパウロは、ユダヤ人と異邦人（非ユダヤ人）に区別はなく、唯一人の神がすべての人を祝福する、としました。すでに述べているように、ユダヤ人がイエスを拒否した結果、異邦人に神の救いが及ぶことになり、これを見て神の選民であるユダヤ人が「ねたみ」を起こし（新約ローマ書11章11節）、最終的にユダヤ人を含むすべての人が救われる、というのがパウロの考えたことです。キリスト教は、中世からユダヤ人を差別、迫害してきましたが、1961年にローマ法王が開いた第二バチカン公会議で、その誤りを認めました。

イエスを神が天に引き上げた

では、イスラムはユダヤ教、キリスト教をどのように見ているか。イスラムの教典クルアーンは、アブラハムをはじめとするユダヤのすべての預言者とイエスに下された神の啓示を認め、それを信じる（クルアーン3章78節）、ということを示しています。これも述べてきたとおりです。ムハンマドはユダヤ人と戦いもしましたが、ユダヤ人が選民として神から特別の扱いを受けたことも認めています。

イエスに関しては、イエスはマリヤが神から託された「御言葉」（ロゴス）（クルアーン4章169節）であり、またイエスは「現世でも来世でも高いほまれを受け、神の傍近き座につく」（クルアーン3章40節）と書いていて、預言者の中でも特別な扱いをしています。

ただ、イエスを神とする考えは拒否します。ユダヤ人がイエスを殺した、という点については、それを否定し「神がおそば近くに引き上げた」（クルアーン4章158節）のだとします。

最後の審判で神が解決する

イスラムの基本は、ユダヤ教の神も、キリスト教の神も、イスラムが信仰するアッラーと同一の神である、という立場です。ユダヤ教徒、キリスト教徒にこう呼びかけています。「アッラーのことで我々と言ひ争いをしようというのか。アッラーは我々の神でもあれば、お前たちの神様でもあるのに」（クルアーン2章133節）。「アッラーさえ

その気になり給えば、お前たち全部を一個の宗派にしてしまうこともおできになる」(クルアーン16章95節)。「いづれ復活の日(最後の審判)にアッラーが彼らの論争に判決をお下しになる」(クルアーン2章107節)。

最後の審判の時には、神が自ら判断を下されるから「言い争いをするのではない」と書いていることは、大切な視点でしょう。

識者たちもこのように言っています。まず、フランス系のイスラエル人の哲学者、アンドレ・シュラキ。この人は旧約、新約とクルアーンのフランス語訳を行った人です。彼は「ユダヤ教とキリスト教の仲たがいの真因を思想的次元に求めるのは根拠がない」(アンドレ・シュラキ『ユダヤ思想』)といっています。ユダヤ教徒は孤立し、外界と絶縁して長い世紀を生き延びてきたために、キリスト教もイスラムもほとんど検討も加えずに退けた、と考えています。お互いに知らない、ということが争いの原因、という主張です。

教えの中心に違いはない

インド出身のイスラム学者、モハンマド・アクラム・ナドウィーはこのように言います。三つの一神教は「中心の教えに違いはない。それは神を信じよ、という教えた」。「中世のイスラム教徒は他の一神教信仰との境界を先鋭化した」(カーラ・パワー『コーランには本当は何が書かれていたか?』)。そして、宗教をアイデンティティ、自分の属する集団、と考えるべきではない、信仰は帰属ではない、と主張しています。

また、宗教を少し離れて、世俗的観点を取り上げると、ユダヤ系でフランスの経済学者、政治家であるジャック・アタリは概略次のように述べています。「イスラエルが中東における西欧の飛び地のような形で生き延びることはできない。長い全面戦争になればシオニズムは終焉を迎える。アラブが夢見る経済統一が平和のために不可欠である。イスラエルはEJ的な『中東連合』のメンバーとして、中東の中で共通の生活様式や混合婚によって、アイデンティティを失う」(ジャック・アタリ『ユダヤ人、世界と貨幣』)。

国際情勢から見る場合も、三つの一神教はお互いの差異を先鋭化しない方向に進むということでしょう。現に、日本のキリスト教会の集会にたくさんのユダヤ人が来る

とか、イスラエルの大学で新約聖書の研究が進んでいるとか、といった変化が起こってきています。



「嘆きの壁」と「岩のドーム」。手前にある石の壁がローマ軍によって破壊されたユダヤ教神殿の石壁。ユダヤ人の祈りの場となっている聖地。後ろにある金のドームが、ムハンマドが夢の中で天に上ったというイスラムの聖地「岩のドーム」。(秋山哲撮影)



第2部

「神と人間はどのように関わってきたか」

第2部を始めるにあたって

同じ神を信じる「啓典の民」

私は2016年10月から2017年4月にかけて、「一神教のもつた糸はほぐせるか」というタイトルで、7回連続の小勉強会を開きました。大変大勢の会員の方々が、毎回熱心に受講していただき、感謝なことでした。

ダイレクトフォース事務局からのおすすりもあつて、今回は「神と人間はどのように関わってきたか」というタイトル、つまり、一神教の考える神と人間の関係はどうなっているのか、という小勉強会を開きます。前回の小勉強会の延長線上といえますが、一神教の神と人間の関係を様々な側面から考えるという内容です。これを考えることによって、一神教の考える神の姿が明確になります。不安定な世の中にあつて、神と人間がどのようにして良い関係を築くことができるか、を理解することができます。

前回の勉強会でしっかりとお話をしたつもりですが、旧約聖書を教典とするユダヤ教、新約・旧約聖書を教典とするキリスト教、さらに、クルアーンを教典とするイスラムの信じている神は別々の神ではありません。同じ一人の神です。同じ一人の神、明確に言えば「アブラハムが信じた神」です。

アブラハムは、ユダヤ教の最初の信徒といえますから、ユダヤ教の神はアブラハムが信じた神です。キリスト教のイエス・キリストは、アブラハムの神と、その子キリス



スト、聖霊が「三位一体」となった一つの神です。イスラムの神はアッラーと呼ばれていますが、クルアーンは、アブラハムの信じた神をアッラーといっているのであつて、ユダヤ教徒もキリスト教徒もアッラーを信じている、同じ神からの啓示を受けている「啓典の民」である、というのがイスラムの基本となつている考えです。

聖書も読んでいなかった十字軍騎士

同じ神を信じている三つの宗教がなぜ歴史を通じて抗争して来ているのか。それは相互無知が原因です。ゲーテンベルグが印刷術を発明する15世紀まで、写本によつて聖書を読むことができたのはほんの一握りの聖職者だけでした。十字軍の騎士たちは聖書もクルアーンも読まないままに、ユダヤ教徒やイスラム教徒を攻撃し、殺戮したのです。無知の悲劇です。

今も、世界の非イスラム圏でクルアーンを読んでいる人がどのくらいいるのでしょうか。日本でも、ほとんどの人は読んでいません。世界中の非イスラム教徒は、政治指導者を含めて、イスラムがどういう宗教か、全くといっていいほど知らずに、イスラムに対して恐怖感を抱き、嫌悪しているのです。ヘイトスピーチが横行しています。それが反作用としてのテロを呼び起こします。

差異の先鋭化が進む

一方、イスラムは時代的には遅れて出発した宗教集団ですから、先行する二つの同根宗教との差別化、アイデンティティ確立が急務でした。そこでユダヤ教、キリスト教との差異の先鋭化が進み、融和ができなかったといえます。それに、アラビア語以外のクルアーンを教典として認めない、基本的に翻訳を認めないこともあつて、広大な非アラビア語圏を含むイスラム圏に本当のクルアーンの教えが浸透しているのかどうか、という問題もあります。

そこにこんがらがった国際政治問題がいくつもあつて、糸はもつれてしまつているのです。

私は、イスラムを擁護する立場にあるわけではありません。ただ、先に説明しているように、新聞記者として、最大イスラム人口を抱えるインドネシアに3年間駐在し、1979年にイランで起こったホメイニ革命直後にイスラム諸国を回って取材したという経験からイスラムについていくらかの知識を持っているにすぎません。

また、日本イスラエル親善協会という公益社団法人の運営に長く関わりましたので、ユダヤ教についてもそれなりの知識を持っています。つまり、イスラムについて、またユダヤ教について知識のあるキリスト教徒、三つの一神教の関わってきた新聞記者という立場で、皆さんにお話をさせていただくのです。

真性の神にひれ伏す

もちろん私のキリスト教徒としての信仰は揺らいではおりません。このようなお話を
する課程で信仰はより確固たるものになった、とってもよいぐらいです。

私はこう思っています。私の信じているのはイエス・キリストが示された三位一体の
神です。この神が真実の神であると確信しています。ユダヤ教徒もイスラム信徒も三位
一体の神を認めませんが、三つの宗教はいずれも「神が来る」、神がこの世に現れるこ
とを信じているのです。従って、神が来られた時には真性の神がどなたか、それははっ
きりします。

このようなことを言うのは、「はじめに」で書いた使徒パウロの前例があるからです。
熱心なユダヤ教徒であって、キリスト教徒を迫害する役割を担っていたパウロが、迫害
をするために出かけたダマスコ門外で「なぜ、わたしを迫害するのか」という天からの
声を聞きます（新約使徒言行録9章4節）。「どなたですか」と問うパウロに「あなたが
迫害しているイエスである」（同5節）と答えが帰って来るのです。真性の神がイエス
であると分かったパウロは大きなショックを受け、キリスト教宣教に邁進することにな
ります。

私の信じている神と違う神が現れたら、別の神であったなら、私も真性の神の前にひ
れ伏します。しかし、私の神が真性の神であり、それが終末のときにはつきり確認できる、
ユダヤ教徒もイスラム信徒も、皆その神の前にひれ伏す、そのことを信じて、神の出現、
再臨を待ち望んでいる、これが私の揺れない立場です。



第1回 罪とは何か

2017年11月7日

聖書は永遠のベストセラー

第1回のテーマは「罪とは何か」ですが、話に入る前に、前回の勉強会でお話した
聖書について、いくらかの補足をします。

「聖書は永遠のベストセラー」と呼ばれ、その発行部数は、数字の取り方によるので
しよが、1815年から1998年の間に3880億冊発行されたと言われます。
2000年の一年間でも6億6000万冊が全世界で発行されています。クルアーン
と違って、どの言語に翻訳しても聖書は聖書ということになっているので、翻訳され
ている言葉は2500語にのぼるそうです。

キリスト教信徒数が少ない日本でも、日本聖書協会の調べでは、1874年から
2004年の間に3億5000万部、販売または配布されています。

クルアーンも、8億冊発行されているという数字があります。こちらはアラビア語
でなければ聖典と認められません。

過去にさかのぼって、聖書ほど大量に発行された書物はないと思います。かなりの
数発行されたのは、聖書以外では「毛沢東語録」とか、モルモン教関係の書物があり
ます。

ユダヤ教の聖典である旧約聖書は、創世記から始まって、39巻の書物で構成され
ています。

キリスト教が旧約聖書とともに聖典とする新約聖書は「マタイによる福音書」から
始まって、27巻です。旧約、新約両方合わせると66巻。

イスラムの聖典「クルアーン」は、巻には分かれていなくて、114章からなっ
ています。

三千年以上前にさかのぼる内容

旧約聖書各巻の著作年は、諸説もあって、明確になっているものは少ない。しかし、
BC1000年頃のダビデ王時代以前に存在していたとみられる基本資料や記録が



2017年11月7日（金）13：30から15：30まで、大手町に移転した
DFオフィスに隣接するDF共有会議室で13名が参加して、第2部「神と人
間はどのように関わってきたか」の第1回目が開催された。

しっかりとあります。旧約の冒頭にモーセに由来するとされる「モーセ五書」が置か
れています。モーセはBC1250年前後の人です。
モーセ以外に言行が記録されている預言者たちの活動期はBC800年代からBC
400年代にまたがっています。
そうすると、明確には言えないが、預言書は、少なくともBC9世紀からBC5世
紀の間に、それぞれ成立したということになります。
古い部分は、今からでいうと、3000年以上前です。きわめて古い時代からの文
書です。
しかも、内容が確立してから長期間、一言一句変わらずに伝承されていま
す。

旧約聖書の全ページが揃って現存する最も古い写本は、レニングラード写本といい、
AD1008年に書写が完成したものです。この写本の写真版が私の手元に一時期あ
りました。現在使われている旧約聖書と完全に一致しています。これが現行聖書の底
本となっています。少なくとも1000年以上、文章は完全に保持されているのです。
死海写本といわれる聖書関係の文書は、2000年前のイエス在世のころの写本で
す。聖書の完本ではありませんが、例えばイザヤ書などが現在使用しているものと同
じ内容で見つかっています。

新約聖書は、AD45年からAD90年の間に書かれたものの集積です。1900
年以上前に書かれています。

クルアーンは、ムハンマドが啓示を受けたものを記録していますが、AD651年
に編集が完了しています。

筆者は王様から漁師まで

三つの経典を通じていえることですが、古い時代のもを含めて、記述が詳細であり、
非常に人間的であることが特色です。

特色をもう一つあげると、このように長期間にわたって、たくさんの人、王様もあ
れば、預言者、学者、農夫、漁師、商人と様々な人が書いたにも関わらず、基本線が
揺らいでいない、ということです。基本線は、唯一の神への絶対的信頼です。

旧約聖書、新約聖書とクルアーンに登場する人物を通じて、一神教の信仰対象であ
る絶対神が人間にどのように関わって来ているか、その神に人間はどのように対応し

てきたか、ということをお話ししていきます。

聖書登場人物は、人祖アダムに始まって、太古の人々、モーセのような指導者、ダビデのような王様、預言者たち、異邦人の女、などなど、実に多彩です。しかも、神の目から見て正しい人ばかりが取り上げられているのではない。さまざまな人物が、赤裸々に人間性豊かに生きている様が描写されています。

われわれの目から見て、どうしてこの人物が神に重用されるのか、神はなぜこの人を許し、この人を許さないのか、不思議なケースもまま現れる。これらのストーリーを考えていくとき、神が人間に求めるものが何か、ということが浮かび上がってきます。それによって、三宗教の神がどのような神であるか、理解して頂ければと考えます。

特に、旧約聖書は、神が人間に何を求めているか、人間がそれにどのように対応してきたか、という物語が満載です。今回の勉強会では、従って、旧約聖書を引用することが多くなると思います。旧約聖書はキリスト教にとっても新約聖書と併存する経典であり、クルアーンも旧約の物語をたびたび引用しているので、三宗教の神と人間の関係は旧約聖書から学べると思います。



ヘブライ語聖書のレニングラード写本（ファクシミリ版）の創世記。右の行、上端が創世記1章1節「初めに、神は天地を創造された」。レニングラード写本はAD1008年に完成した旧約全巻の完本で最古のもの。現在の聖書の底本となっている。

人間を常に見つめる神

三宗教の神は、人間世界と関わりなく、天高く、孤高を保つ神ではありません。このような神を哲学的には理神論と言いますが、そのような神ではありません。神は、昔も今も、未来も、永遠におられる、どこにでも、常におられる遍在の神であり、一人一人の人間を常に見つめておられる、人間世界に強い関心があって、裁きの神であると同時に、愛に満ちた神。これが三宗教共通の神です。

特定の宗教を宣伝するつもりはありません。皆さんが三宗教の神と人間との関係について理解をして頂き、皆さんの社会的活動にいさかきでもお役に立つことができば、と念願しています。

前回の小勉強会と重複する部分があると思います。前回、参加しておられない方もあるでしょうから、必要な部分は繰り返すことになりました。前回参加されたかたは、同じ事を言っているな、と思われるかも知れませんが、「あのことか」と言う程度に軽く受け流して頂ければありがたいと思います。

神を信じないことが罪

第1回は、「罪とは何か」がテーマです。三つの一宗教が考えている罪、それは「神に従わないこと」である、というのがこの日の結論です。

教会に行くと、罪を悔い改めなさい、といわれて、多くの日本の人はとまどいます。罪なんか犯していない、と思う人がほとんどだからです。教会のいう罪は違うのです。私も、「御子を信じる者は裁かれぬ」。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである」(新約ヨハネ福音書3章18節)によって罪の意味を理解しました。「独り子」すなわちイエス・キリストの「御名」を信じないこと、従わないこと、それが罪なのです。

アダムとエバが禁断の木の実を食べて人類に罪が宿った、といいますが、木の実に罪が含まれていたわけではありません。神が「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない」(旧約創世記2章17節)と命じていたにもかかわらずそれを食べた、神の命令に従わなかった、ということが罪なのです。

言ですが、その性質に「かたどり、似せて」造られた人間は、従って、自立しています。自己意識を持ちます。自立自存の神と、それに似せて造られたために自立自存的性質を持つ人間、ここに基本的な問題があります。神と人間の間に存在する矛盾です。

罪は神と人間の間の矛盾から

今回のシリーズを貫いているのは、神に従わない人間、つまり神に対して罪を犯し続ける人間、というテーマですが、それは人類誕生以来のこの矛盾に原因があります。

神に従うためには神の考えを理解しなければなりません。神から明示的にその意志を伝達されることはきわめて希です。ではどうするか。一つは、神の意志が書き込まれている聖書を熟読すること、もう一つは、祈りです。祈りは、自分勝手なことを願うためにするものではありません。自分の行おうとすること、考えていることを神に伝え、神の意志とのすりあわせをするものです。自問自答の内に、神の導きを得る、ということが可能になります。

創世記には、人類最初の殺人事件が書かれています。アダムとエバの長男カインが弟のアベルを殺します(旧約創世記4章)。その原因は、二人が神に捧げた品物の内、アベルが捧げた物を神が喜び、カインの捧げ物に神が目をとめなかったからです。神がどのような捧げ物を喜ぶか、カインは真剣に考えなかったのです。祈りによって神の意志を知る努力を怠った、ということです。それが弟殺しを引き起こし、神から追放処分を受けることになったのです。

第2回 神を信じるとはどういうことか

無条件で神に従ったノア

2017年12月5日

第1回は、一神教のいう罪とはどういうことか、を論じ「神に従わないことが罪である」と話しました。それに続く第2回は、では「神に従う」「神を信じる」とはどういうことか、を説明します。

神の性質に似せて造られた人間

旧約聖書の冒頭にある創世記の天地創造の物語によると、神は、言葉を発することによって万物を創造されます。創造の最後に神は「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」(旧約創世記1章26節)といって人間を造られる。神は見えないものですから、創造された人間も見えせん。形はありませんから神に「かたどり、似せて」というのは神の性質にかたどり、似せて、という意味です。神の性質にかたどり、似せた見えない人間が生まれます。

創世記2章で、神が再度人間を創造する場面が記述されます。「神は土の塵で人を形作り、その鼻に命の息を吹き入れられた」(旧約創世記2章7節)と書いてあるのです。神は、創造したけれども見えない人間に、粘土細工によって動物的な形を与え、神の息を吹き入れる、という三段階の作業をされた。「人はこうして生きる者となった」(同)のです。

神は、何者にも頼らない自立した存在です。神がモーセに「わたしはある」(旧約出エジプト記3章14節)と名乗られたのは、何者にも依存せずに存在するという宣

神を信じた人の例として、旧約聖書に登場するノアとアブラハムを取り上げます。

ノアは神から、悪事ばかり行う人類を滅ぼす大洪水を起こす、箱舟を作って家族全員でそれに乗れ、と命じられたとき（旧約創世記6章17節以下）、神の命令に従いました。大洪水という「まだ見ていない事柄」（新約ヘブライ人への手紙11章7節）を神から告げられて、そのまま信じた、無条件に神のいうことを信じた。それによって「義を受け継ぐ者となった」（同）のです。彼の信仰を神は「義」と認定します。「義」というのは、神の前に正しい、という意味で、神に従わない罪という概念の対極にある言葉です。

イスラムのクルアーンは、ノアを神が派遣した預言者として重要視していて、彼が民衆に神の前に正しくあれ、と説得を繰り返していた、と設定しています。民衆から非難、批判を浴びながらも説得を続けたことを神が「義」と認めたのだという趣旨（クルアーン54章14節）を書いています。

アブラハムと信仰義認

ノアより10代後のアブラハムは、「生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す土地へ行け」（旧約創世記12章1節）という神の命令に従って故郷ウルから出て行きます。行き先は知らされないまま、神に命じられるままに、です。クルアーンは、このアブラハムを「純正な信仰の人だった」（クルアーン16章121節）と称賛しています。出て行ったアブラハムに神は約束を重ねます。約束の一つは、ユーフラティス河からシナイ半島までの大きな土地を彼とその子孫に与える（旧約創世記15章18節）ということでした。これは、パレスチナ問題の根源になっている神の約束です。

さらに、90歳になっていて子のなかったアブラハムに対して、息子が生まれる、子孫は星の数ようになる（同5節）、と約束します。聖書は、これを聞いたアブラハムは「主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」（同6節）と書きます。聖書のクライマックスといつてよい場面です。

神の前に正しい人と認定される、義人となるのは、無条件に神を信じる、という単純な行為による。これを「信仰義認」といいます。マルチン・ルターはこのことに気付いて宗教改革を起こすのです。カソリックのローマ法王庁が、人の罪を赦す免罪符を売っていたのに対して、それは間違いだ、神の救いが与えられるのは行いではなく、神を信じることによるのだ、と主張したことによってプロテスタントが興るのです。

これは、カソリック批判であると同時に、戒律を守るという行為によって神の救いにあずかるというユダヤ教の考え方と相違しています。しかし、旧約聖書、新約聖書、さらにクルアーンを通じて神が人間に求めている基本は「信仰義認」です。行いは重要としても、行いそのものが基本ではない、行いの背後に無条件で神を信じる信仰がなければならない、ということは、ユダヤ教の経典である旧約聖書も明確に指摘していることです。

神は信仰をテストする

この信仰を神はテストします。アブラハムは、神の約束によって生まれた一人息子、イサクを「焼き尽くす」いけにえとして捧げよ、と神に命じられます（旧約創世記22章1節）。彼はこの命令にも直ちに従おうと行動を起こします。イサクを刃にかかけようとする寸前に神はそれを止め、神のいかなる命令にも従うというテストにアブラハムは合格するのです（同12節）。

イスラエルの名君となるダビデ王は、神によって王となる人物として認定（旧約1サムエル記16章12節）されてから、長い期間、前任の王であるサウルに命を狙われて逃げ、かつ戦うという苦難に遭遇します。これは、ダビデが神に従う人間であるかどうかを神がテストし、訓練する期間であった、と考えることができます。

第3回 神と人間は契約関係にある

ノアに始まる神との契約

2018年1月11日

前回、ノアとアブラハムの行動を聖書から引用して、信仰とはどういうことか、を話しました。そのノアとアブラハムの物語のもう一つのポイントは神と人間の契約というテーマです。ユダヤ教、キリスト教、イスラムという三つの一神教の大きな特色は、神と人間が契約関係に入る、という考え方です。

聖書に現れる最初の神と人間の契約は、ノア契約と言われるものです。神は大洪水

いうことを基本にされていて、神の指示を守らないものには厳しい懲罰が来ることを前提にしています。

守り続けられる契約

一つの疑問は、現在から見ても3000年以上も昔の人モーセに神が示したこれらの詳細な規定がどうして現代にまで伝えられているのか、ということでしょう。実は、モーセという人は記録をしっかりと残した人だったのです。例えば、イスラエル民族はモーセに率いられてエジプトを脱出し、40年間シナイ半島の中をさまよったのですが、いづどこを登って、いづどこに着いた、という記録が旧約聖書の民数記にしっかりと記録されています。シナイ半島で二回人口調査も実施していて、12氏族といわれるイスラエル人の氏族ごとの人口がこと細かく、民数記に記載されています。セム族は早い段階から文字を使っていましたから、モーセは書き残すことができたのです。神から与えられた戒律に関しても、彼は記録を残し、7年ごとに集会で読み聞かせるように言い残しています（旧約申命記31章10節）。長く続いた王国の時代には、神に従わない背信の王もたくさんいましたが、モーセが書き残した文書によって信仰復興が何度か行われ、神と人間の契約が、旧約聖書という形で現在に受け継がれているのです。

の後、今後は洪水で人類を滅ぼすようなことはしない、という契約（旧約創世記9章11節）をノアに対して提案します。この契約は神が約束するだけの片務契約のように見えますが、ノアは祭壇を築き、いけにえを捧げて神に感謝をします。

神と人間が契約する、というのは日本人の感覚では理解がむずかしいかもしれませんが、宗教とは別の世界でも、国家の起源としてルソーが展開した「社会契約」という理論があるのは、聖書がいつている神と人間の契約に起因していると考えられることもできます。

アブラハムに対する神の契約は、前回説明していますが、カナンの土地を与える、ということが大きなポイントです。

このアブラハム契約と同じ内容を、神は、アブラハムの子イサクとも（旧約創世記26章3節）、孫ヤコブとも（旧約創世記28章13節）結びます。この過程で、神はアブラハムの信仰を守ることをイサク、ヤコブに求め、人間の側に神に従う、神を信じる、という義務が生じます。神を信じるという義務を守らなければ、神からの懲罰がある、という双務契約になるのです。

詳細な契約を守る

神との契約に関して重要な役割を果たすのはモーセです。時代が下って、エジプトで奴隸的狀態になっていたイスラエル人を、神の命令によってモーセが救い出しますが、モーセはシナイ山で神から十戒を与えられます（旧約出エジプト記20章2節以下）。人類が守るべき掟です。十戒は大原則を掲げているだけですが、それに続いて、神は詳細な戒律、つまり刑法、民法から宗教規則、社会慣習にかかわる詳細な掟をモーセを通じてイスラエル民族に示す。旧約聖書の出エジプト記とレビ記に、これらの戒律が延々と記載されています。これらを命じられたとおりに実行することが神に従うことであり、戒律を守らない場合には厳しい懲罰が神から送りこまれることになりま（旧約申命記11章26節）。ユダヤ教超正統派はこれら規則を完全にするとうとする立場に立っています。

よく知られている食事に関する規則もこれら戒律の一部ですが、貧困者に対する配慮など、社会政策的規則もしっかりと記載されています。また男女関係に関しても詳細な規定があります。これら規則の考え方はイスラムのクルアーン（コーラン）にも引き継がれているものがたくさんあります。イスラムも、神の指示を人間が守る、と



AD1455頃にグーテンベルグが印刷した最初の聖書。旧約箴言の冒頭部分。箴言は「ソロモンの箴言」ともいわれるので、花文字にソロモン王を使っている。（大英博物館絵葉書）

世界を運営する神

このように神は経済に関しても、人間活動に深く関与するのですが、それは「神の主権」にかかわる問題です。

新旧約聖書もクルアーンも、神が世界のすべての運営を行う権能を持っているとされています。王権神授説ということが言われますが、モーセであれダビデであれ、イスラエルの指導者は神から一方的に任命されています。ヨーロッパの王様が戴冠式で聖職者から王冠を授かるというのは、主権者は神であり、王はその代理人という理解からでていることです。

奇蹟は神の現存を示す

以下は奇蹟についてです。

旧約、新約聖書は奇蹟が満載です。例えば、モーセに率いられてイスラエル人がエジプトを脱出する物語は、奇蹟の連続です（旧約出エジプト7章8節以下）。エジプトをさまざまな災難が襲い、紅海が二つに割れる（旧約出エジプト記14章21節）、といった出来事です。

時代が下がつて預言者の時代になると、預言者による死人の復活があります。また、新約聖書はイエスの起こした奇蹟をたくさん記載していますが、イエスが死人3人を蘇らせたことを書いています（新約ヨハネ福音書11章43節ほか）。イエスは、目の見えない人や病人を癒します。

これらの記事を読んでわかることは以下です。

奇蹟は、「神が生きていること」を人々に知らせるために行われる。

奇蹟を受ける人が神を無条件に信じることが奇蹟が生じる条件である。

奇蹟は、神であるイエスや有力な預言者だけが行えるのではない。イエスの弟子も、現在の信徒も、聖霊を受けて神を宿すならば、奇蹟は行える。

イエスを神とは認めないクルアーンは、イエスの生涯を奇蹟であると記しています（クルアーン21章91節）。神の息吹によってマリヤにイエスが宿った、イエスは十字架刑によって死んだのではなく、神が天に引き上げた、というのがクルアーンの記すイエス像です。イエスそのものが神の奇蹟としています。

心を尽くし魂を尽くして神を愛する

安息日に薪を集めた男は石投げ刑で殺されます（旧約民数記15章36節）。神の前に捧げる香炉の火が神の指示と違っていた、という理由で祭司の子2人が神の火に打たれて死にます（旧約レビ記10章2節）。モーセに反逆しようとした祭司たちも地割れと神の火で殺されます（旧約民数記16章35節）。些細なことも、大きなことも、神の命令、指示に反する行為には厳しい処罰がのぞみます。これは新約の時代に入っても同じことです。新約には、収入を偽って教会への献金を少くした夫婦が死んだという記録があります（新約使徒言行録5章1〜10節）。旧約聖書も新約聖書も「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、主を愛しなさい」（旧約申命記6章4節）という神の言葉を人間と神の関係の基本に置くからです。この申命記6章4節は「シャマ」と呼ばれて、イスラエル人の家の入口に必ず掲げられる祈りの言葉です。

祝福と呪いの神学

ここから、モーセが申命記の中で説く「祝福と呪いの神学」が生まれます。「神の声に聞き従う」場合には、さまざまな神の祝福を受ける（旧約申命記28章2節）、「聞き従わない」ならば、さまざまな「呪い」、不幸が起こって来る（同15節）。イスラエルの歴史を見ると、神に反抗し、異教信仰、偶像崇拜になびいた時代がたびたびです。イスラエルが不幸と苦難の歴史を歩むのはその罰を受けたためということが出来ます。神による懲罰の歴史です。

神は、多神教信仰、偶像崇拜を禁じます。そのような信仰を持つ民を滅ぼす戦争を神は命じます（旧約申命記20章17節）。旧約聖書にはたくさん例があります。クルアーンも、異教徒に対して徹底的に戦え、と書いています（クルアーン66章9節）。その点では、聖書もクルアーンも違いがありません。イスラムは異教徒を殺す宗教だ、といった説明をする書物が最近も出版されていますが、それはイスラムだけの特徴ではありません。しかし、クルアーンは、ユダヤ教、キリスト教とイスラムを、神の啓示を受けた「啓典の民」としていて、多神教に対する戦いとは違った扱いをしています。「啓典の民」には「人頭税」を支払うまで戦う、というのが原則です（クルアーン9章29節）。「啓典の民」同士の論争は、「最後の審判」のときに神が結論を出す、判決をくだす（クルアーン2章107節）、とクルアーンは言っています。

第4回 神の主権と奇蹟

2018年2月9日

土地は神の物

前回は神との契約について話しましたが、その延長線上で、ユダヤ教の経済に関する規則をまず説明します。その上で、今回の主題である神の「主権」について話します。後半は、「奇蹟」についての説明です。

モーセに由来する旧約聖書のレビ記は、戒律を詳しく述べますが、その中に経済についての考え方が出てきます。それは、「安息年」「ヨベルの年」（旧約レビ記25章1節以下）という考え方です。

安息年は、6年間種を蒔き、収穫した後、7年目は土地を全く休ませる、というものです。安息年を7回数えた後の50年目がヨベルの年で、この年には、それまでに売買した土地を元の所有者に返却することになっています。土地を売った人には買い戻す権利があるのです。同胞を奴隷とすることは認められず、雇っている人もヨベルの年には家族のもとに帰らせます。

神は一貫しているのです。「土地はわたしのもの」（旧約レビ記25章23節）と。人は神の所有する土地に寄留しているにすぎないのです。

貧しくなった人を援助しなければならない、収穫する時には落穂ひろいをする人の分を残さなければならない、という困窮者対策も書いてあります。イスラムでは金利が禁止されていることが知られていますが、この考え方はもともと旧約聖書に書かれています（旧約出エジプト記22章24節）。これは貧困者対策であって、それをクルアーンが受け継いでいる（クルアーン2章276節）のです。貧困を防ぐために、イスラムでは喜捨（ザカド）が大切にされます。六信五行の中に喜捨は位置づけられで、クルアーンはこれでもか、これでもかというほどに、信徒に喜捨を勧めています（クルアーン23章62節）。ユダヤ教、キリスト教でそれに対応するのは「什一献金」で、収入の10分の1を神に捧げる（旧約創世記28章22節、新約ルカ福音書11章42節）ことになっています。

第5回 神に罰せられた人たち

2018年3月7日

神の人モーセは罰せられた

今回は、神の与える罰について話します。前回、神が主権を持つ、ということを読説明しましたが、主権者である神は、神の指示に違反したものを厳しく罰するのです。

出エジプトの指導者であり、モーセ五書によつて神の戒律を伝え、「神の人」とも呼ばれるモーセも罰せられました。イスラエル人を率いてシナイの原野を彷徨していたとき、水に渇く民のために、岩から水を出す、という奇蹟を行います。その方法が神の指示の通りではなかった、という罪が問われるのです。

神は、「岩に向かつて水を出せと命じなさい」（旧約民数記20章8節）と指示したのですが、モーセは水を出すために杖で岩を二度たたいた（同11節）。しかも、神が水を与えてくださる、というのではなく、自分が民のために水を出してやる、という態度をとった。これが神に罰せられる原因となりました。

モーセは、エジプトを脱出し、40年間イスラエル人を率いてシナイ半島彷徨し、カナンに入る直前、神に命じられてネボ山に登り、そこで死にます。目的のカナンを見渡すことは許されたが、そこに入ることは神が許さなかったのです（旧約申命記32章50節以下）。

不平を言った民はカナンに入れなかった

モーセだけではありません。出エジプトに加わったイスラエル人全体も罰せられます。エジプトを出たときと、カナンに入る直前の2回、人口調査が行われましたがともに20歳以上の男子が60万人余です。ところが1回目の調査の時にいた20歳以上の男たちは、2回目の調査では2人しか生き残っていませんでした（旧約民数記26章64節）。シナイ彷徨40年の間、イスラエル人はたびたび神に反抗、反逆したので、神は「わたしに対して不平を言った者（略）はだれ一人、わたしは（略）あなたたちを住まわせると言った土地にはいることはない」（旧約民数記14章29節）と宣言したからです。カナンに入ることができたのは、エジプトを出たとき20歳以下であった人たちです。神に従い通した2人を除いて、イスラエル人の大集団はすっかり人が入れ替わったのです。シナイの40年は神がイスラエル人を訓練した40年といいますが、神に従わない人がいなくなるための40年といった方がよいかもしれません。

第6回 神と論争した人たち

2018年4月3日

キリシタンの信仰

冒頭に、最近出た『バテレンの世紀』（渡辺京二著）という書物に触れ、キリスト教の日本伝来初期における日本人信徒の信仰について述べました。

この本で紹介されている古文書によると、イエズス会とフランシスコ会、ドミニコ会という宣教師団同士の確執について、日本人信徒が「でうす（神）は御一体、でうすの御法もひとつにてござ候。きりしたん衆二つにわかれ候である事一段めいわく」と諫めています。神は一人という一神教の基本理解がしっかりしていたことが分かります。やはり最近出た別の書物（『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』）は、長年の「隠れキリシタン」時代には信仰がいまいになつていったことを論証していますが、それはやむを得ないことだったでしょう。

悪魔とはなにか

そのあと、前回、話し残した「悪魔とは何か」を取り上げました。神に敵対するサタン、悪魔ということがキリスト教世界でも言われますが、そのように考えるのは、万物を神が創造したという基本からはずれます。善と悪の対立という二元論はゾロアスター教、マニ教の考え方です。キリスト教の初期時代、至高神と、悪も造り出した下位の創造神という議論がありましたが、これは異端として排除されています。

悪は、神が人間に与える「試練」と考えるべきです。旧約聖書のヨブ記には、神の前での天使会議に悪魔も出席して、ヨブを懲らしめる提案を行い、神がその提案を認める場面があります（旧約ヨブ記1章9節以下）。新約聖書には、イエス・キリストが宣教を開始する前に、荒野で悪魔の誘惑を受けたことが記されていますが、聖書は「悪魔から誘惑を受けるために、霊に導かれて荒野へ行かれた」（新約マタイ福音書4章1節）と書いています。神の霊が、悪魔から誘惑を受けるためのテスト会場へイエスを導いたのです。クルアーンは、悪魔もアツラーの許しなしに人に害を与えることばできない（クルアーン2章95節）と書いています。神は、人間の信仰の状況を調べる

抵抗する預言者ヨナ

ヨナという預言者は神に抵抗したので有名です。神は彼に、罪深い町ニネベ（現在のイラクのモスル）に行くように命じます。この神の指示を逃れるためにヨナは舟で逃亡する（旧約ヨナ書1章3節）のですが、海が荒れ、海に落とされます。彼は、巨魚に呑み込まれてニネベに運ばれます。神は彼にニネベが滅びると預言するように命じます。ニネベの住民はこの預言を聞いて反省して行動を改めます。そこで神はニネベを滅ぼすことをやめます。ヨナは、自分の預言が実現しなかったことを怒ります（旧約ヨナ書4章1節）。ニネベは異邦人の町ですが、神は、悪を悔いるならば災いを下ささない、という基本方針をヨナに説きます（同10節）。

ヨブを叱った神

先に触れた旧約聖書のヨブ記は、戯曲のように見事な文学作品ですが、サタンに打たれて全財産、全家族を失い、自分も病苦にさいなまされるヨブと、彼を慰めにきた4人の男の長い対話です。ヨブは、自分がなぜこのように苦しむのか、その理由を神に問いたい、論じたい、と言いつ続ける（旧約ヨブ記31章35節）。友人たちは、災難が来るには理由がある、と勧善懲悪論を展開するのですが、最後に神が登場して、天地万物を創造したのが神、万物を動かしているのも神だと詳細な説明をして、人間の浅い知識で神を論じることを叱る（旧約ヨブ記38—39章）。

これら神と対話し、論じた人たちのケースをみて分かることは、神は信仰深い人の願いや主張を聞かれる、しかし、神が決断しておられることの基本を変えることはない、ということです。

では、神との対話は、実際に行えるのか。実際に神と対話できる人がないとは言いませんが、一般的には祈りによって対話が成り立ちます。聖書を十分に読んでいるならば、祈るうちに、聖書の中の必要な箇所が答えとして浮かび上がってきます。それが神との対話だと思えます。

祈りについて知っておかなければならないことは、祈るとき、末尾に「主の御名によって」という言葉を用いることの意味です。これは、祈りの発信人が主自身であることとを意味します。社員が社長名で手紙を書くのと同じことで、祈っているのは自分だが、その祈りは神が認める内容だ、という趣旨です。自分勝手な祈りに意味はありません。

ために、時により災いや悪を人間世界に送りこみ、人間がそれに耐え、神に従い続けるかどうかを確認されるのです。

神と交渉したアブラハム

今回のメインテーマは「神と論争した人たち」です。神は絶対服従を求めますが、人と対話、交渉もされる。例えば、神がソドムとゴモラという罪惡の町を滅ぼすと宣言したとき、信仰の人アブラハムは神と交渉します。そこに「正しい人」が50人いても滅ぼすのですか、と神に問いかける。50人いれば町を赦す、と神が答えると、40人ではどうか、30人ではどうか、20人では、10人では、と粘り強く神に食い下がるのです。神は「10人いたら滅ぼさない」という趣旨の回答をします（旧約創世記18章22節以下）が、翌日、ソドムとゴモラは絶滅します。ただ悪事に染まっていなかったアブラハムの甥一家4人は事前に神によつて町の外にだされて救われます。正しい人が10人はいなかったからこの町は滅ぼされたのでしょうか。しかし、アブラハムの主張を認め、正しい人は救い出されたのです。

出エジプトの立役者であるモーセは、2回神を説得します。1回目は、イスラエル人が金の子牛を作つて礼拝した時です。神がイスラエル民族を滅ぼすと言われたのに対して、口下手と言つていたモーセが神に諄々と論旨を展開して、思いとどまるように説得をします（旧約出エジプト記32章11節以下）。神は、計画を思いとどまります（同14節）。2回目は、やはりイスラエル民族がシナイ半島を彷徨しているとき、敵は強大で攻めることはできない、と斥候が報告するのを聞いて、エジプトへ帰ろうと騒ぐ民衆に対して神が怒つた場面。モーセは神に赦しを請い、再度神を説得します（旧約民数記14章13節以下）。神はモーセの説得を受け入れます。しかし、この時神は完全に許したのではなかつた。すでに話しているように、エジプトを出たときのイスラエル民族は全員、シナイ彷徨40年の間に死に絶えていました。たびたび神に反抗した罪を問われたのです。目的地方ナンに入つたのはその子供たちの世代だつたのです。いわば執行猶予でした（旧約民数記14章20節以下）。



8世紀のイスラム圏。当時はユダヤ人の8割がこの広大な地域でイスラム教徒と共存していた、(『pen books ユダヤとは何か』市川裕監修、阪急コミュニケーションズ、2012)

祈りも、その答えも、聖書を読みこむことから導かれるのです。

第7回 「神の選び」と大罪

2018年5月15日

王は神が選ぶ

今回は「神の選び」と「選びと罪」という話をします。

イスラエルには王がいませんでした。カナンの地に入って以降約200年間は、部族連合的な時代で、各地から自然発生的に現れる軍事的、宗教的指導者である「士師」（さびきつかさ）が民族を率いていました。民衆の中から、他の国々と同じような王がほしいという声があり、宗教的指導者であったサムエルが神に考えを聞きます。神は、「一人の男をベニヤミンの地からあなたのもとに遣わす。あなたは彼に油を注ぎ、わたしの民の指導者とせよ」（旧約Ⅰサムエル記9章16節）と答え、それに従って現れたサウルにサムエルは油を注いで初代のイスラエル王とします。油を注ぐ、というのは神による任命です。

強い王であったサウルは、しかし神の意に従わないので、神は彼を退けることを決め、サムエルにベツレヘムのエッサイの所に行くように命じます（旧約Ⅰサムエル書16章1節）。そこで最も若い息子ダビデを神が選び、サムエルがダビデに油を注ぎます。このように、イスラエルの王は神が選ぶのです。サウルは人気の高いダビデに嫉妬して追い回しますが、最終的にダビデが王となり、国家を統一し、国土を拡張して名君とうたわれます。

神は預言者ナタンを通じて「ダビデ預言」（旧約Ⅱサムエル書7章12、13節）と言われているものを告げます。この預言は、ダビデの子孫が王位を継ぐこと、その王座はとこしえに堅く据えられること、を告げています。

予言通り、ダビデの子、ソロモンが王位を継ぎますが、ソロモンの死後、王国は北と南の二つの王国に分裂し、「王座はとこしえに堅くすえられる」という預言が実現しませんでした。そこで、ユダヤ教ではこの預言は、メシア（救世主）によって実現する預言であると考えます。ダビデの子孫からメシアが生まれる、ということユダヤ人は強く信じています。

じ趣旨のことを書いています（クルアーン10章107節）。

そうだとすると、信仰を持つとか持たないということの意味がなくなります。救われる者が決まっているのなら、教会へ行ったり、罪を悔い改めたりすることはない、ということになりかねません。キリスト教のカルヴァン派の信徒は、しかし、日常の仕事は神から与えられているのであって、それに励むことによって成果をあげ、自分が救われる側、「選ばれた者」であることを確信できる、と考えます。これが資本主義の精神を作った、というのがマックス・ヴェバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で説いた議論です。議論としては面倒ですが、神と人間のかかわりを考えるときの重要なポイントです。

第8回 選民と異邦人

2018年6月20日

どの民族よりも貧弱だが

今回は「選民と異邦人」の説明をします。選民の問題は、第1部の中の「旧約聖書とユダヤ教の考え」でも説明したので重複部分があります。

聖書はユダヤ人を選民、それ以外をすべて異邦人と記します。神はアブラハムにその子孫を「大きな国民とする」（旧約創世記12章2節）と約束し、モーセはユダヤ人が「神の宝の民とされた」（旧約申命記7章6節）と述べます。しかし注意しなければならぬのは、ユダヤ人が優れた民族として神に選ばれたのではない、ということです。モーセは「あなたたちはどの民族よりも貧弱であった」（同7節）にも関わらず神に選ばれた、といいます。

では選民とはどういう意味なのか。神が存在すること、生きていること、神が世界を動かしていることを示す道具として選ばれた、というのが私の受け止めです。

イスラエル民族は、神に選ばれたといいながら、神に従い尽くした民族ではありません。神に背き、他の神々になびき続けた歴史を持っています。この結果、神に罰せられます。古代の北イスラエル王国は滅亡（BC722年）し、南ユダ王国もバビロン捕囚（BC587年）の悲劇に遭います。

ダビデの大罪

キリスト教も、「ダビデ預言」を信じます。イエス・キリストは人間的にはダビデの子孫であって、このイエスによって神の支配が実現する、という信仰です。

このように、ダビデは神の将来計画を担うキーマンとして神によって選ばれました。そのダビデが大罪を犯します。配下の武将ウリヤの妻、バト・シェバと姦淫を行い、夫を戦死させるように仕向けて、彼女を妃にします（旧約Ⅱサムエル書11章27節）。人倫にもとる大罪です。神はナタンを派遣してダビデを叱責し（旧約Ⅱサムエル書12章9節）、ダビデを罰します。生まれた子が死に、王子の一人が反乱を起こします。

しかし、神は「ダビデ預言」を取り消すような決定的処罰はしません。神のキーマンとしての選びは維持されます。ダビデが罪を悔い（旧約詩編38編1節以下）生涯信仰が揺るがなかった（旧約列王記15章5節）からです。

ソロモンの罪との対比

王位を継いだソロモンも罪を犯します。多数の外国人の妃を抱え、彼女たちの求めるままに、異教の祭壇を作ります（旧約Ⅰ列王記11章1節以下）。これに対する神の処罰が前述の王国分裂（同11節以下）です。

ダビデとソロモンに対する処罰の違いは大事です。ダビデの罪は人間世界の罪です。それに対してソロモンの罪は信仰の根本にかかわる罪です。唯一神への信仰を守らず、異教の神になびく、これは神にとっては許すことのできない罪です。

時代をさかのぼることになりますが、アブラハムの孫、ヤコブは父であるイサクを騙して、双子の兄エサウから相続権を奪います（旧約創世記27章35節）。ひどい罪と思えますが、これは二人が母の胎内にいるときの神の選びの言葉、「兄が弟に仕えるようになる」（旧約創世記25章23節）が実現したのだとされています（新約ローマ書9章18節）。

このように「神の選び」が神と人間の間係を規定します。さらに進んでいくと「予定説」になります。神が救う人間はあらかじめ決定されていて（新約ローマ書8章30節）、「書き記された書」（旧約出エジプト記32章32節）あるいは「命の書」（旧約詩編69編29節）というものに書かれている、と聖書に書いてあるのです。クルアーンも同

神が世界を運営している証拠

ところが、それよりもずっと昔の人モーセ（BC1250年頃）は、神が彼らを父祖の地に連れ戻し、繁栄させると預言しています（旧約申命記30章5節）。また預言者イザヤ（BC750年頃）はペルシャのキュロス王が捕囚から解放すると預言しました（旧約イザヤ書44章28節）。この預言は捕囚が起こるよりもはるか以前です。預言の通り、200年以上もたってから異邦人のキュロス王によって捕囚から解放され、神殿を再建します。

モーセの預言は、このときの捕囚からの帰還だけを指すのではないと思います。時代は降って、AD70年にユダヤはローマに滅ぼされ、ユダヤ人は世界に離散しますが、1900年近くたった1948年、元の土地にイスラエルという国家を再建します。今、技術大国として繁栄しています。世界の歴史に例のないことです。宗教的に見ても、神殿が破壊され祭司もいなくなったユダヤ教は消滅しませんでした。離散のユダヤ人が信仰を守り抜きました。キリスト教、イスラムという後継宗教を含めると、ユダヤ教の始祖アブラハムが信じた神を信仰する人口は世界の半数を占めます。神の意志によって世界が運行している、そのことを示す役割を担っているのが選民だということです。

神は、背信のイスラエルを罰すると同時に、正しい信仰を守る「残りの者」を必ず残します（旧約Ⅰ列王記19章18節）。いくら罪を犯してもイスラエルを滅ぼし尽くすことはせずに、「残りの者」を温存して、神の意志を実現する選民としての役割を果たさせるのです。

救われた異邦人たち

では、選民ではない異邦人を神はどう考えているのだろうか。旧約聖書にも新約聖書にも異邦人が神の恩恵を受ける、救われるという場面がいくつも記述されています。アブラハムに現れた神は「地上の氏族はすべて、あなたによって祝福にはいる」（旧約創世記12章3節）と述べており、最初の段階から神は全人類の救いを前提にしています。キリスト教が全世界に広まったのはそのためです。選民だけを特別に優遇する神ではないのです。

イスラエルと敵対したアラムの将軍が重い皮膚病を治してもらうために預言者エリ

シヤの所にくる話が旧約にあります（旧約Ⅱ列王記5章14節）。エリシヤの言うとおりにヨルダン川に体を七回沈めると病は治る。異邦人であっても神は癒されるのです。

新約聖書には異邦人の救いに関する話がいくつも出てきます。

例えば、イスラエルと抗争するカナン族の女の話。娘の病を治してほしいといってイエスのところに来ます。イエスが、自分はイスラエルの救いのために働く、というのに対して、選民イスラエルの食卓から落ちるパン屑がほしい、つまり、選民に与えられる恩恵のおこぼれでよいから、というのです。イエスは「あなたの信仰は立派だ」（新約マタイ福音書15章28節）といって願いを受け入れます。

ローマ軍の部隊長の話。中風の部下を癒してほしい、とやってきたので、イエスは行こうとすると、部隊長は来るに及ばない、ひと言だけいってくれれば治る、といいます。権威のある者が兵隊にこれをやれ、といえば兵隊はそれをする、それと同じで、神であるイエスがひと言命じれば治る、というのです。イエスは「イスラエルの中でさえこれほどの信仰をみたことがない。（略）信じたとおりになるように」（新約マタイ福音書8章10節）と応じます。部下はその瞬間に治りました。

すべての人類が救われる

イエスの弟子、ペトロはやはりローマ軍の部隊長に招かれて家に行き、福音を宣べ伝えていると、聞いていたローマ人に聖霊が降る（新約使徒言行録10章44節）ということが起こっています。異邦人に聖霊が降った最初です。

ペトロは異邦人に対してこのように言います。「あなたがたは『かつては神の民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けなかったが今は憐れみを受けている』のです」（新約1ペトロの手紙2章10節）。この言葉の『の中には、実は旧約ホセア書の引用です。旧約時代から選民も異邦人も神の救いにあずかることになっていたのです。

ユダヤ教徒はイエスを神とするキリスト教を拒否しましたが、第1部で話したように、新約聖書で使徒パウロはこのように言います。「神は御自分の民（選民）を退けられたのか。決してそうではない」（新約ローマ書11章1節）。パウロはキリスト教によって異邦人が神の救いにあずかるようになったが、異邦人の救いが達成されればユダヤ人が救われるのだと述べています。最終的には、神を信じるすべての人類が救われるのです。

第9回 神は人をどこに導くのか

2018年7月17日

神の主権による平和な世界

最終回の今回は、「神は人をどこに導くのか」という問題を話します。

よく天国、地獄といいますが、聖書にはその言葉は出てきません。新約聖書ではイエスにおいて実現する「神の国」が語られますが、旧約聖書にはそれもありません。旧約聖書には「陰府」（よみ）という死者の世界があり、神と断絶した闇の世界とされています（旧約詩編88編6節）。この陰府に投げ出されないで「神の救い」にあずかるうとするのが旧約の望みです。

「終わりの日」に現れる「神の救い」のイメージは旧約ではイザヤ書にあります。その日、「主の神殿の山」（エルサレム）は高くそびえ（旧約イザヤ書2章2節）、国々の民はそれに向かって押し寄せます。神の言葉がそこから出るからです。「主は国々の争いを裁き、多くの民を成められる。彼らは剣を打ち直して鍬とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」（旧約イザヤ書2章4節）。国々が武器を捨て、戦争のことを考えなくなります。つまり、神が主権を行使する平和な世界が出現するのです。そこには現在の世界と同じような国々があり、政治も産業も、人々の生活も変わりなく継続します。

「終わりの日」の審判

しかし、「終わりの日」は審判の日でもあります。神を信じない者、神に従わない者は厳しく罰せられるのです。幻によって示される将来預言を黙示文学といいますが、その一つ、旧約のダニエル書は、神の裁きによる激しい戦争が起けると預言し（旧約ダニエル書11章）、やはり旧約のヨエル書は天変地異を預言しています（旧約ヨエル3章4節）。神に従い、神を信じ「主の御名を呼ぶ者は皆救われる」（同5節）ことになっています。

しかし、旧約聖書には、人間が物質世界を離脱して霊的世界に生きる、という考えはないように思われます。

イエス・キリストもダニエル書の「終わりの日」の有様を弟子たちに告げて解説しています（新約マタイ福音書24章4節以下）。その上でイエスは、イエス自らが雲に



1947年のパレスチナ分割国連決議によるユダヤ国家（緑）とアラブ国家（グレイ）。（「イスラエルの情報」イスラエル外務省。2010）

乗って天から「再臨」して苦難の中にある信徒たちを救う（新約マタイ福音書24章30節以下）ということを示しました。復活後に天に上ったイエスが再度出現するとする預言です。

旧約聖書も、「終わりの日」の前に聖霊が降る（旧約ヨエル書3章1節）ことによって、神に対する正しい信仰が生まれ、それが救いのもととなることを説いています。新約聖書はさらにキリストの再出現、再臨によって人類が救われるとします。

新約の結語はキリストの再臨

新約聖書にも黙示文学があります。「ヨハネの黙示録」ですが、これも「終わりの日」の有様を詳細に述べています。裁きがあります。死者たちも呼び出され、神に従わなかった人たちは「火の池」に投げ込まれて「第二の死」を迎えます（新約ヨハネ黙示録20章14節）。旧約聖書と違って、現在の天と地は滅び去り、新しい天と地が新創造されます。神の首都である新しいエルサレムが天から降りてきます。そこでは神が人と共にあって、死も悲しみも労苦もない霊的世界が現出するとのです（新約ヨハネ黙示録21章1節以下）。

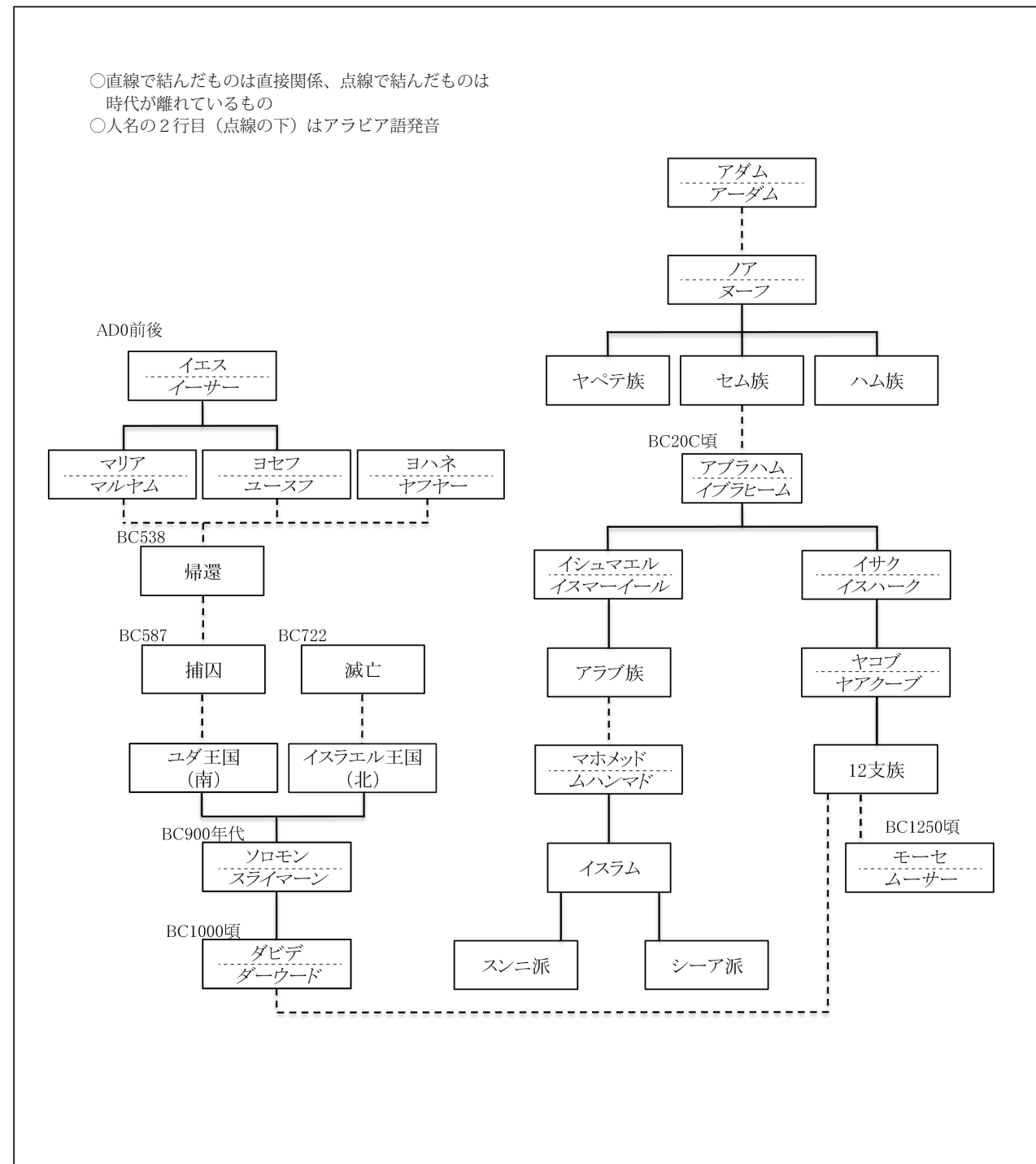
「ヨハネの黙示録」はこのように書いて、最後を『わたし（神）はすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください』（新約ヨハネ黙示録22章20節）と閉じるのです。これが新約聖書の末尾の言葉です。キリストの再臨による霊的新世界を持ち臨むのが新約聖書です。

イスラムの地獄と楽園

イスラムはどのように考えているか。イスラムは、この世ではなく来世に望みを置くことを基本としています（クルアーン29章64節）。イスラム信徒の信仰は「六信五行」と言いますが、六信のなかに来世を信じるが入っていることでそれが分かれます。そして「終わりの日」は、新旧約聖書と同様に、裁きの日です。生きている者も死んでいる者も呼び出され、行いにしたがって裁かれます。神から処罰を受ける者は、上を見ても下を見ても火、熱風、熱湯をあびるゲヘナ（地獄）へ送りこまれます。他方、楽園は神のお傍で、麗しい川や果物に満ちた世界を楽しむことになっています（クルアーン56章4節以下）。

このように、「終わりの日」は厳しい裁きとともにやって来るとするのが三つの一神

一 神教関連系譜



教共通の考え方です。

神の細やかな愛

しかし、厳しい裁きを行う神は同時に人類を愛しています。旧約でモーセがイスラエル民族をエジプトから救い出したのは、神が愛をもって、神の民という本来の姿へとイスラエル民族を取り戻したからです（旧約出エジプト記6章6節）。

イエス・キリストの十字架刑による死は、神の愛によって、神に反逆し続ける人類の罪を贖った、帳消しにしたことを意味します。「神はその独り子をおあたえになったほどに、世を愛された」（新約ヨハネ福音書3章16節）とヨハネによる福音書がその意味を述べていますが、これが新約聖書の基本となる考え方です。

神は、アダムとエバを楽園から追放するとき、裸を恥じる二人に皮の衣をあてます（旧約創世記3章21節）。弟を殺して追放されるカインには印をつけてその安全を保障します（旧約創世記4章15節）。神の愛はこまやかです。



2018年7月17日（火）第2部「神と人はどのように関わってきたか」の最終回。満室の状態で一連のシリーズが終了した。この後、シリーズの再開を期待し、15名の参加者とともに「丹後王国みけづく」で懇親会が開催され大いに盛り上がった。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム関連略年史

BC	2060-1950	アブラハムがメソポタミアのウルから移動開始
	1250 頃	モーセに指導されたユダヤ人が出エジプト シナイ山で十戒授与
	1200 頃	ヨシュアに率いられたユダヤ人がカナン征服
	1005-966	ダビデ王がエルサレムを首都に。統一王国成立
	966-926	ソロモン王が第一神殿建設
	926	南ユダ王国と北イスラエル王国に分裂
	853-841	預言者エリヤが活動
	722	アッシリアによって北イスラエル王国滅ぼされる
	745-680 頃	預言者イザヤが活動
	627-583 頃	預言者エレミヤが活動
	600 頃 -536	預言者ダニエルが活動
	593 頃 -588	預言者エゼキエルが活動
	587	バビロンがエルサレムを征服し南ユダ王国滅亡 第一神殿が破壊され、バビロン捕囚が始まる
	538	バビロン捕囚から帰還
	516-515	第二神殿完成
	433	旧約聖書の預言活動終了、旧約正典完結
	332	アレキサンドロス大王の征服によるヘレニズム化
	167	マカベアの反乱（ハヌカの祭の起源）
	63	ローマのポンペイウスがエルサレムを占領
	37	ヘロデ大王、パレスチナ全土の王となる
	20-19	第三神殿完成
	7-4	イエスの誕生
AD	6	ユダヤがローマの直轄領となる
	30-33	イエスの十字架刑
	33-34	パウロの回心
	49-67	パウロ、諸書簡を執筆
	58-63	ルカ福音書成立
	60-70	マルコ福音書成立
	60 後半	マタイ福音書成立
	64	ローマ皇帝ネロによるキリスト教迫害はじまる
	66-70	ユダヤ大反乱をローマ軍が鎮圧、第三神殿破壊 ユダヤ人の離散がはじまる
	88-120	ヨハネ福音書成立
	313	コンスタンティヌス帝、キリスト教公認（ミラノ勅令）
	325	ニケア公会議で原ニケア信条（使徒信条の原型）成立
	300 年代末	エルサレム・タルムード編纂
	500 年頃	バビロニア・タルムード編纂
	570 頃	ムハンマドの誕生
	610 頃	ムハンマドの召命（最初の啓示）
	622	ムハンマドと信徒、メッカからメディナに遷る
	624-628	イスラム軍がユダヤ教徒と戦い、屈服させる（人頭税）
	630	イスラム軍メッカ征服。カーバ神殿の偶像類破壊
	632	ムハンマド死去。バクル初代カリフとなる
	638	イスラム軍、エルサレムを占領
	651	クルアーン編纂
	661	第四代カリフ、アリー暗殺。ウマイヤ朝成立 イスラムがスンニ派とシーア派に分裂へ
	687-692	エルサレムに岩のドーム建設

	710	イスラム軍、ジブラルタル海峡を越えてスペイン征服
	750	ウマイヤ朝倒れ、アッパース朝成立
	969	シーア派のファーティマ朝がエジプト征服
	1031	キリスト教諸国のレコンキスタ（国土回復運動）始まる
	1038	セルジューク朝成立
	1054	カソリック教会と東方正教会が完全に分裂
	1096	第一回十字軍出発
	1099	十字軍、エルサレム占領、エルサレム王国成立
	1187	サラディンが十字軍を破り、エルサレム奪回
	1291	十字軍国家、すべて消滅
	1299	オスマン・トルコ建国
	1453	オスマン・トルコによってコンスタンティノーブル陥落
	1492	グラナダ陥落してスペインのレコンキスタ完了 スペインでユダヤ教徒追放令と強制改宗
	1517	ルターによる宗教改革はじまる オスマン・トルコがシリア、エジプトを征服
1881-82		ロシアで大ボグロム（ユダヤ人迫害） ユダヤ人のパレスチナ移民（第一次アリア）はじまる
	1897	第一回シオニスト会議、バーゼルで開かれる
	1904	第二次アリア（帰還）始まる
1914-1919		第一次世界大戦
	1915	英国、マクマホン書簡でアラブに対して独立国家を約束
	1916	英、仏、露がサイクス・ピコ協定でトルコ領分割密約
	1917	英外相バルフォア、ユダヤ人民族郷土建設を認めるバルフォア宣言
	1919	トルコの敗戦によりパレスチナは英国の委任統治に 第三次アリア始まる
	1921	イラクとトランス・ヨルダン建国
	1933	ドイツでヒットラーが政権握る。ユダヤ人迫害はじまる
	1941	ドイツ首脳、ユダヤ人抹殺政策を最終確認
	1945	第二次世界大戦終了し、強制収容所からユダヤ人解放
	1947	国連総会、パレスチナ分割を決議
	1948	イスラエル独立。英委任統治終了。第一次中東戦争勃発
	1956	第二次中東戦争。イスラエルがシナイ半島制圧
	1964	パレスチナ解放機構（PLO）結成
	1967	第三次中東戦争（6 日戦争）。エルサレム統一
	1973	第四次中東戦争（ヨムキプール戦争）
	1977	エジプトのサダト大統領エルサレム訪問
	1978	キャンプ・デービット合意 （ガザ、西岸の自治、三年以内に最終的地位交渉の開始）
	1979	イランでイスラム革命起こる エジプトとイスラエルの平和条約調印
	1980	イラン・イラク戦争
	1981	エジプトのサダト大統領暗殺される
	1991	マドリード中東和平会議
	1993	オスロ合意。パレスチナ暫定自治と最終地位交渉始まる
	1994	パレスチナ自治政府発足 ヨルダンとイスラエル、平和条約調印
	1995	クリントン米大統領主導のキャンプ・デービッド会談 ラビン・イスラエル首相暗殺される
	2003	米、EU、露、国連が中東和平ロードマップ公表
	2010	「アラブの春」始まる

「一神教の神と人間
心やすまる三宗教の共通基盤」

一般社団法人ディレクトフォース
会員向け「勉強会」講義録

著 者 秋山 哲

編 集 三納吉一

発行元 オリンピア印刷

発 行 2018年9月

